

解答

一

問一 A 模様 B 重油 C 無敵

問二 壊れたものを技術を用いて修復することで、元のものとは異なる味わい、新しい価値を持ったものへと作りかえることができるという逆転の発想。

問三 すきま

問四 かつて上勝町は、外から持ち込まれた産業廃棄物を住民自身によって燃やすという大規模な環境破壊が当たり前に行われていた。当時を知る「おじさん」たちにとつて、四五種類にも及ぶゴミの分別はとも面倒な作業だったが、慣れるにしたがって負担は減り、今では自ら進んで「ゴミ捨て」に関わることで、最先端の施設で行われる最先端の環境保護活動を行っているという自負を抱いている。

問五 壊れたり、傷ついたりしたものを簡単に捨てるようなシステムは、生き物や、その延長である人間も簡単に捨ててしまうということになる。「役立たず」という名前をつけてカテコライズするのではなく、不完全さや傷や歪みを「捨てる」ことなく受け入れ、価値を見出すということは、地球という環境で生きていく上で備えておくべき基本的な姿勢である。

問六 地球全体における自然破壊の度合いは絶望的な状況にあり、状況を一気に逆転することはもはや不可能である。自然破壊の要因の一つである「捨てる」という行為を見直すこと、すなわち「ゴミ」とレットルを貼られたものを再利用することで、大量生産、大量廃棄でしか成り立たない経済システムを修正しながら、自分たちの生存環境を少しずつ整えていくしか、私たちが生きていく道はない。

二

問一 A 独特 B 刷ら C 興奮

問二 2

問三 罪悪

問四 クラスで孤立してしまった「私」は、バスチアンのように、望めばその通りの世界が立ち現れる能力を手にして、希望を見出せなくなった現実の世界を変えたいと強く願っていた。しかし、いざ無視が解かれると、今度は望みがかなうたびにバスチアンが孤立していったことを思い、ふたたび友達に輪を迎えられた自分も、また孤立してしまうのではないかという不安が高まったから。

問五 イトケは、「私」が「べつに全然臭くない！」と言ったのは自分を孤立から救うためではなく、自分の存在そのものに腹を立てているという身勝手な理由からだということを見抜いていたのだろう。イトケは誰も寄せつけない雰囲気を持っていたが、「私」も救しさを好み、天邪鬼で、人から面倒がられる面を持っていた。似ているからこそ、同じように孤立することを恐れ、クラスメイトの悪意を押しつけて知らん顔をしていた「私」のことを、イトケは軽べつし、憎んでいた。

問六 記憶のなかのイトケの姿は、ありえたかもしれない現実世界の、孤立した「私」の姿でもある。「私」は孤立を恐れるあまり、イトケに孤立をなすりつけて図書室で過ごしたり、自分の本心をいつわって周囲に合わせ、友だちの輪のなかで過ごしたりしていた。今のあなたは自分の本心と向き合っているのか、本当に自分が願っていることが何なのかをわかっているのか、記憶のなかのイトケは今も「私」に問い続けているのである。